

「重度・重複障害児の理解と働きかけの実際」

国立療養所西多賀病院
指導室長 阿部幸泰

：先生方は、障害児をどう教育しようとしているのか。

（目的と手段を取り違えないこと、常に自ら問い続けること）

：教育活動の前提条件 指導書と児の間に交信関係が存在すること

：自発行動の発現 感覚・運動系の使い方とその機能分化 概念学習
記号学習の基礎学習

：自発行動の発現を促すには

「自己決定する力、決定したことを相手に伝える力」を向上させることが重要
（日常のあらゆる場面が教育場面）。

：自発行動とは

注意 探索 受容 拒否のサインに必ず応答行動を起こすこと

（往々にして指導者は発信し児に期待する指導はするが、それに対する児の受信行動を受け止めたという応答行動を発信しない一例：褒め、認め、感謝することが少ない；当たり前と思ひ、また少しの努力を大したことではないと思ひがち；－）

：「受容」の中で教育場面を設定すること

「拒否」には教育場面を設定しないこと 学ことが楽しくなくなる

「感謝される存在」

往々にして、障害児は「感謝する」ことを強要させていないか。

児が出来ることを工夫し（例：ものを取る）、感謝すること。

：障害故の手段の指導にとらわれず、できること（自己決定すること）を、どう認め、援助するかへの意識改革。

：重度・重複障害児の学習成立の条件と学習課題の設定

：その他

語句の定義等

交信行動